

---

# その後の J の 9

黒作

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その後のJの9

### 【Nコード】

N5045V

### 【作者名】

黒作

### 【あらすじ】

Jの9、本多と高久のその後。カテゴリが変わるので、別枠短編として投稿させて頂きました。

## （前書き）

\* 青春（？）恋愛小説モードです。

\* モンハン要素が薄過ぎるのでタグから外しております。

結論から言うと、俺は高久とそういう仲になるんだけど、それは出会ってから8年が経ってからだったりする。

事が終わって息が落ち着くまでぼけっとしてただけど、なんか今更自分の匂いとか気になり出して俺は高久の上からどいた。シャワー浴びてなかったんだ。流れるに。夏なのに。

そそくさとどいた俺を、高久はきょとんと見ていた。妙に浮いたその間をごまかすためもあって、ティッシュを箱ごととって、さかさか間抜けた後始末をする。高久にも。高久は戸惑ってたけど、そこは押し切らせてもらった。詳細は割愛……いや、ゴム持っとけよ俺、ほんとにさあ！ ちよっとこれについては猛烈に申し訳なく。

「あの、ごめん」

「え？」

高久がからだを起こす。見慣れた自分のタオルケットを寄せた仕草に思わず目をそらして、俺はうつむいて口早に言う。高久といるとき、自分は高校の時に戻っている気がする。あんま変わってもないけど。

「持ってなくて」

「あ、……うん。あたしも持ってなかった」

照れた声だった。てか、俺経験値があれなんであれだけど、ゴムって普通女も持ち歩くもんなんだろうか。これ使ってって高久が出てきた場合を想像して、なんかすごく萎えそうになって、勝手だな。

買いに行きやよかったんだよな。コンビニ行って戻って5分なんだから。でも、中断したくなくて。中断して、高久のその気がさめちゃうのがこわくて。なにより、俺がとめたくなくて。だって高久にさわれるときが来るなんて思ってた。

「高久、シャワー浴びる？」

まだ顔を見られなくて、ずいぶんぶつきらばうな感じになってしまふ。

「本多、先でいいよ。まだその……ちょっと痛いから」

「あ、ごめん！」

「い、いいいいいよ、謝らないでよ。それより、シャツ汚しちゃって」

「それは別に」

直前に言われていた通り、高久は初めてだった。俺は驚いた。かなり。すごく。

だって、高久はかわいいんだよ。えらい美人だとかスタイルがいいとかそういうんじゃないんだけど、性格とか雰囲気とか言えばいいのかな。素直で、やさしくて、よく気を遣う。他の女と話すときとすらすらつままない俺の言葉が、高久と話するときだけは、なんかいい感じになった。それは高久のおかげで、なんでもここにこ拾ってはうれしそうに言葉を返してくれたから。自分と楽しそうに話してくれる女の子を好きにならない男って、あんまりいないと思う。

それに、高久には付き合ってた男もいたはず。俺達はネットで会うほか、土日俺の家で会うことも増えたんだけど（といっても驚くべき清らかさだったけど）、ある土曜、高久は男の車に送ってもらってきた。多分俺に見られるつもりはなかったんだろう、俺のアパートから少し離れたところで降りていた。でも、たまたま戻りが遅くなった俺はそれを目撃して。それを高久に知られたくなくて、携帯で謝りつつアパートに戻る時間を遅らせた。なんもないとはいえ、男の家に遊びに行くのを送る彼氏。シユールだな。まあ高久かわいいいし、案外しっかりしてるし。俺も手出せるような度胸ないし。だってこの頃の高久っていつも膝くらいのかわいいスカートとかで来てたんだよ。俺安パイ過ぎる。

そりゃさ、高久が俺の家に来てなにしてるって、ふたりでぎゃー

ぎやー騒ぎながらゲーム、無言でひたすらゲーム、寝オチしてもゲーム、朝が来たらパンとかかじってまたゲーム、もしくは昼まで寝てて外に飯食いに行くとか、内容はそんなだったんだけどな！  
高久が隣でかわいく体育座りしてても、俺は淡々とホラーアクションを進めてたりだったわけよ！ 高久はなんでそんなにゲームが好きなんだよ！ 俺もな！

いやだって、えろえろしいことなんて、したいかしたくないかで言えばそりゃしたいに決まってるんだけど、俺はそういう空気に強い抵抗があった。俺は高久とゲームしてりゃ楽しかったから、その時間が大切だったから、下手に男女を持ち込みたくなくて、俺が男だってことも意識されるのがこわくて、それは多分高久も同じだと思ってた。俺達のあいだに、恋愛の話は出なかった。時々、同級生の結婚話なんかは出たりしても、自分達の話は不自然なほどふれなかった。

俺は多分、早いうちから高久を好きだったけど、伝えようと思ったことはなかった。妙な言い方になるかもしれないけど、絶対に振られるつもりはなかった。気づかれなければ、伝えなければ振られることもないわけで、そうすれば関係は続いていくはずだったからたとえば高久がゲームに飽きるまでは。

だから、高久が誰かと付き合おうが、そんなことに俺は干渉しない。詮索もしない。毎週連絡をとって、遊ぶときはひたすらゲームをやって、たわいない、ただ楽しいだけの話を楽しんだ。

変化は、多分3週間前。どうでもいいんだけど、俺ここ数年、半月前とか1ヶ月前とかいう単語を使った覚えがない。週単位で数えてて、それは多分高久との付き合いのせい。

入社3年の俺に転勤の辞令が出た。会社の仕組み的にいずれあるってわかってたから驚きはしなかったけど、これでもう高久と会って遊ぶことはなくなるんだなって思った。いくらなんでもゲームするためだけに新幹線で1時間半とか来ないよな。鈍行だと4時間か

？ 時間あまつたた大学の頃は、高久はちんたら2時間かけて遊びに来てくれてたけどさ。電車乗るの好きとか言って。

就職は地元で出来たから、またお互いの家が近くなった。俺は実家にも戻れたけど、もうそんな気はしなかったから会社近くに自分で部屋を借りた。それがここ。高久は変わらず遊びに来てくれる。

転勤を告げたとき、高久は、そっか、と言った。だから俺は観光地のどこそこがあるから、大型連休とか来たら案内するよ、とか言った。恥ずかしい限りなんだけど、これ別に社交辞令とかじゃなくて、高久ともしまた会えるとしたらそんなただだろうって、わりと勇気出さなきゃ言えなかったりで、チキンお変わりなく。穴掘って埋まりたい。しかもこれがゲーム以外での初めての誘いだっただけで死にたい。

それから俺達の間にはなんか妙な沈黙が増えた。いや、これまで気にならなかった沈黙が気になるようになったっていうのが正しいか。そのあとの週末に会った高久はいつも通りに見えたけど、ともするとぼーっとしていた。多分俺も。そいで、さっきになる。

来週の土日に引越すから、その日取りやら確認して、手伝うよって言うてくれてありがとうって答えて、それからなんとなくモンハンの話になった。俺達はもうとくにモンハンをやらなくなっていたけど、まーあの頃若かったよなとかいや今も変わってねえ25になっても徹ゲとかどうだみたいな話で笑ってたんだけど、急に高久が黙りこんで、どうしたのかと思ったら突然帰るって言い出した。待て夜中の2時だぞ。地元っていったって高久の家は電車使って40分くらい。

電車ないよ、いいタクシー拾うから、じゃあ俺車とってくるからちょっと待ってて、いらない、どうしたんだよ、どうもしないしなんでもない、え、そんなこと言われたら俺傷つくんだけど！？普通にシヨックを受けた俺を高久はやつと振り向いて、俺がかわいいと思ってた目からぼろっと涙がこぼれて、思わずマジでなんてアホっぽい言葉をつぶやいたら怒りの形相でたたかれた。胸にこぶしだ

つただけど痛かった。普通にとても。

そのまま顔を覆って泣き出した高久を、抱き寄せたいとか思うんだけどこのチキンからだか動かない。彼氏いると思ってたし。ものすごく葛藤して頭をなでた。ニアミス以外で高久にはじめてさわった。

高久は真っ赤になった目を拭いながら俺を見て、あのね、と言った。へんなこととしてごめん、嫌いにならないで。震えた声の訴えに、俺のバカはなんて答えたって、なんで？ って答えた。なんでは！ ねえだろ！ フリーズした高久にやっと自分の下手に気づいて高速で弁解する。いやちがう嫌うわけないから驚いた！ とっさにしては簡潔だった、上手にまとめられました。だめだ肉焼きネタ不完全燃焼。

なんか言わなきゃ、なんか高久が恥じ入ってる気がするからなんとかしなきゃと思つて、そうだ俺がもつと恥かきやいいんじゃね、たとえば振られるとか。あれだけ表に出さないようにしてたのに、大丈夫だよ高久、俺なんて高久のこと好きなんだからって、告白した。そんな告白があるかって殴られればよかったのに。大体意味が通らない。俺の中で通つてても、聞いてるほうはわからんだろう。と思つてただけ。

高久は俺を見て再びフリーズ。俺も自分がそんなこと言うと思つてなかったんでフリーズ。今思えばこの時の俺も相当テンパってたんだ。高久がぱかっと口を開けて、あたしも本多が好きです、つて。驚いた顔のまま棒読みで。俺、あ、うん。また沈黙した。なんだこいつら。なんだ俺達。

どのくらい固まつてたんだろう。多分たいした時間じゃないけど、感じてる時間はえらい長かった。高久、帰るの？ 聞いたら高久が顔を上げたから、帰らないでよ、と続けた。死ぬほど顔が熱かった。高久の顔も真っ赤になった。すげえ、ひとの顔が赤くなるのってほんとにわかるんだ、はじめて知った。ってことは俺もバレバレなんか？ 高久はうなずいてくれた。



どうしようもなく気持ちかはやって、そのわりに強張りまくる腕を伸ばして、高久の手に触れた。高久は目をさらに見開いて俺を見て、でもそこに俺に対する恐怖とか抵抗とかそういうのが全然見つけられなかったから、そのまま引き寄せた。ひどくゆっくりと顔を近づけたとき、高久がなにかつぶやいたのか、それまできゅって閉じていた口を小さく開いた。白い歯が一瞬のぞいたのに俺は興奮したらしくて吸い寄せられるようにキスをした。頭がしびれて麻痺してって意味同じなのかな知らないけど、触れ合わせるだけのキスを何度かするうち高久が俺の両肩に下からしがみついてからだを押しつけたから、やり返すみたいに強く抱きしめた。俺はずっと抱きしめたかったんだって初めて知って泣きそうになった。すき、って高久が泣いてるみたいな声でささやいて、うん、って答えた。キスをしながらベッドに高久を倒して、のしかかるみたいな姿勢になったら完全にスイッチが入った。高久がいつもの定位置の俺のベッドにいなかったとしても、移動する気にはならなかったと思う。……ゴムを買いに行く気にも。

高久の希望通り、シーツは捨てることになった。まあそりゃ、自分の血がついたシーツを俺がずっと使い続けるのとかいやだろうな。高久はシーツを換えたベッドに座る。高久は俺の部屋にいるとき、いつもここに座っている。ちなみに俺はデスク椅子か、床のかクッション。

やっとシャワーを浴びてふたりともひとごち……と思ったら、シャワーから上がってきた高久の表情が暗い。てか、どうして正座してるんだ？

「高久、具合悪い？」

ちろりと俺を見てくる。というか、睨まれた気がする。

「本多君」

「はい」

びくつと。正座する。なんで君づけなんでしょうか。

「本多君は、ひょっとして、けいけんしゃだったんですか」  
「はっ!？」

「思い返して類推するに、その結論が出てくるのです」  
顔を真っ赤にして、大真面目な顔で高久が聞いてくる。

「えーと……怒ってる？」

「答えになってません」

なんで怒ってんだ!? ええ、でもあんまり話したくないぞ。自分の名譽的に。

「本多ってば」

じれている。答えなんてがんばりは俺には許されないようです。

「はじめてではない、けど、でもはじめてみたいなもの、だよ?」  
びくびく。小動物モード。

「そういうお店とか?」

「違うよ!」

思わず全力で否定した。

「じゃあ、か、彼女がいたの?」

「彼女では、ないけど……」

「彼女じゃないひととしたの」

「いやその、ちょっとややこしい話で」

「ややこしい? 彼氏だったの?」

「違いますよ! そういう発想はおやめなさいよ!」

「じゃあ早く答えてってば!」

高久ベッドばん。いやだって本当にあんまり!

「えーと、大学の時の先輩と、……何回か」

回数を思い出そうとして、できなかった。2、3回じゃなかったような。でも6回もしてないような。気持ちよかったとは思っけど、気持ちよくない記憶。

大学で入っていたゲーム研究会の集まりに、友達の少ない俺は卒

業してからもちよいちよい顔を出していた。ほんでその飲み会である女の先輩につかまったわけです。そのひとはゲー研じゃなくて漫画研究会OGで、美人でスタイルがよかった。噂はいろいろあつて、飲み会にしか顔を出さないのは新品の男を探すためだとかいうのがあつて、とりあえず俺に限ってはそれは事実だった。えらい飲まされて気がついたら俺つてば部室のとなりでパンツおろされてた。あんなとき痛感させられたのは、俺は草食系だけどMっ気はゼロだったってこと。しかし俺新入生どころか23になった社会人だったんだけど。

それから何回か呼び出されて、何回かそういうことをした。先輩に恋愛感情はなかった。なんで俺なんですかって聞いてみたら笑われた。そのあと、本多君が好きだからよ、ってキスをされて、そうか質問自体があんまりにも意味がなかったんだってわかった。俺と同じ状況の男は他に何人もいた。

ホイホイ行った理由はただひとつ、俺が女とできることなんてこの先ないかもっていうことだった。その時期も高久は会いに来てくれていたけど、高久には彼氏がいるし高久を裏切ってる気もしなかった。ただ自分のことは裏切っていた。だから何度目かの先輩の呼び出しで、もうやりません、呼ばれてももう来ませんと伝えた。

先輩は少し話そうかと言って、とてもたわいない話をした。本当につまんない、どうでもいい話だった。世間話にも最低レベルだ。たまにしか顔を出さないくせに話し上手で人気者のこのひとらしくないと思ったけど、最後だからと付き合った。

ふと、本当にふと思いついて俺は先輩に言った。捨てられたいから拾うんですか。俺と先輩はろくに話したことなくて、やってる時間のほうがずっと長かったけど、体を合わせるってなんかやっぱ通じたりするのかな。先輩は快樂が好きで破滅的だった。だけど今、俺が先輩と縁を切るって言った今、このひとはすごく安心しているのがわかった。伝えたら、傷ついた目をしたくせに。さみしそうな目をしたくせに。俺は言うべきじゃなかった。先輩の見開かれた目

が忘れられない。先輩は、そうね、とつぶやいた。いらなくなつたこたつみたいに見られると、ほっとするね、って。俺はきつとちやんとわかつてないけど、それってすごく悲しい話ってそれだけはわかつた。どうしようもない長い沈黙を俺達はやり過ごして、先輩はそれじゃあねと笑つて去つていった。メールは来なくなつた。俺ももう飲み会に行かなくなつた。思い出すたびに胸をかきむしりたくなるけど、でも俺は先輩を家に呼ぶことはできなかった。したくなかつた。そういうこと。

「どういうこと？」

人がどんだけ聞いてほしくないのよオーラを出しまくろうが、根掘り葉掘り聞き出そうとした高久は、それも聞いた。

「高久さん、聞きすぎじゃないかな……」

「これまで聞かないでいたもん。本多聞いてほしくなさそうだったから」

口をとがらされたらかわいいと思わざるを得ない。俺ちよろい。「どういうことだったの。本多は、先輩をどう思つたの」

高久には適当に省いて話していたけど、それが悪かつたようだ。つまり高久の聞きたい部分はそこ。

「このベッドは高久のだから」

これでいいだろう？ 仏頂面になつたのは照れているからなのでぜひ察して下さい。高久が顔を歪めた。

「このベッドで先輩とえっちしてたら、大変なことになつてたよ」

「た、大変なこと？」

「大変なことだよ」

こええ。高久は立ち上がり、俺の机の上をがちゃがちゃやりだした。なにをしてるのかと思つたら、油性マジック？

「なにしてんの？」

「名前を書くの」

何言つてるんだろーと思つたらベッドに押し倒されたよキヤーなんですか！？

「ちょ、高久っ!？」

Tシャツを思いつきりまくられる。きゅばんって聞き馴染んだ音がして、腹が猛烈にこそばゆく。

「やめ、くすぐってえ!」

「我慢!」

待って高久ってこんな子だったっけ! そして俺なんかよく襲われてる気がするなあ! はははそうか受けか! いやー!

えい、とか言って高久が俺をひっくり返す。

「背中無理まじで無理!」

「おとなしくしなさいっ!」

あれ、命令されるとおとなしくなっちゃう! あほか、というわけでは腹と背中に胃『S高校3-E高久里歌』と書かれた。結構でかい字で。

「なんてことを……」

もうTシャツ脱げなくなね。自分の腹に書かれた文字を見て呆然とする。てかこれ白いシャツとか着て汗かいたらにじむんじゃ。

まあこれで気が済んだらうと高久を見たら、まだぶすくれている。

「まだ気が済まないの? 俺は多少情はうつたけど先輩に恋愛感情とかなかったし、えーと正直、抱いてるっていうか抱かれてただけですね、それにもう一切連絡とってないし今なにしてるのかも知らないし」

「やきもちは理屈じゃないんだい」

高久が抱きついてきた。ぎゅーっと力を込めてしがみついて、顔を押しつけてくる。かわいくて愛しさが沸きあげてくるんだけど、でも抱きしめ返す以外にどうしていいかわからない。

「高久は、なんで彼氏としなかったの?」

「誰のこと?」

怪訝な顔で言われた。あれ。

俺はさっきの説明でも、高久に彼氏がいるから、という部分は全

部省略した。なんか嫌味っぽい気がしたし、少しでも高久に彼氏のことを思い出してほしくなかったからつてのもある。

「俺の家に車で送ってきてたのは？」

「見てたの？」

「一度だけけど」

「……一度しかないよ」

高久は眉をひそめた。

「会社の先輩に、しつこくされて。どうしてもデートしたいっていうから、じゃあこれから彼氏と会うので、家まで送って下さいって言ったの」

「え、その先輩はそれを聞いたの？」

「うん。本多、鍵開けてくれてたでしょ。とっと入って鍵しめた」

「いや、そういう男の車には乗っちゃいけないと思うんだけど俺」

「後部座席にふたり女の先輩がいたよ。前から相談してて、それじゃ一緒に行く、あんたが捨てたあとは温泉まで運転させるわ、って、アシにしたみたい」

「えええ」

「そっちの先輩達には今もお世話になってるよ」

「いや、まあ、高久が結構しつかりしてるのはわかってるつもりだっただけさ……」

「もうやだ、くやしい」

「え？」

「苦しいよお」

「どうして」

「相変わらず抱きついたまま、俺のＴシャツをつかんで泣いている。やきもちやだ」

痛くてたまらないと言った風に、高久が泣く。

「ごめん」

「もっと、もっと早く言えばよかった。でも本多、全然あたしのこ」とそういう風に見てなかったから」

「そういうわけじゃなかったんだけど」

「だってあたしと会ってた間も先輩と会ってたんだよね。先輩とえ  
つちしたあとにあたしと会ってたんだよね」

「そういう想像はやめたほうがいいって！」

考えるだけ無駄、っていうか考えるだけ悪いじゃないか。

「やだあああ！ 大丈夫だと思ったのに、本多はあたしだけじゃな  
くて女の子に興味ないんだと思ってたのに、いつまで経ってもあ  
まりかつこよくならないから大丈夫だと思ってたのに」

「どさくさでひどいことを言わないようにね！？ 高久さん！？」

「やだ ずるい 本多の童貞とられた ！」

「おいしい！」

俺の喉が赤くなるわ。

「高久、もーほんと落ち着いて、俺ほんとにずっと高久のことが好  
きだったよ、高久しか好きじゃなかったよ」

「ちよつと他の男とえっちしてくる」

「なに言ってるの！？」

あんまりなことを言い出す高久にちらつと怒りを感じて、でもす  
ぐ引っ込んであせりだけになる。いや冗談だとはわかってるけど、  
俺はまだ高久に強く出られる気がまったくなくて、自分のほうが  
惚れていると思うているわけで。

でも、俺の声が多分珍しく強くなったのを、高久は気づいたらし  
かった。

「やきもち、やいてくれる？」

「やくつていうか、……いやそういうのは冗談でもちよつと」

「……怒った？」

高久が俺を見上げてくる。怒るところだったのかもしれないけど、  
その目があんまり切なそうだったからそんなもんは消えた。とりあ  
えずキスをした。

「あたしね、付き合ってるとは思ってなかったけど、でも似たよう  
なことなんだって思ってた。本多に彼女がいたらきつとあたしを呼

はないと思ってたし、あたしも彼氏がいたら来なかったよ」

「……うん」

俺も、そう思ってた。だから、高久に彼氏がいると知ったとき、本当はショックだった。でも俺あきらめが高速な上にデフォルトだから、そりゃまあ俺ならともかく高久ならいておかしくないよな、しょうがねーで聞きもしなかったもんな。嫉妬する権利もないと思つて。

「ごめん」

はじめてすまないって思つて、謝ったら、高久の目にまた新しい涙が盛り上がる。俺のＴシャツ着てる高久を抱き寄せて、けしからぬ再度の欲求は抑えつけて、何度も謝った。高久は少しの間泣いていた。

「ばかみたい。全部、はじめてするのは本多とつて思ってた。プランニングジェイドの新しいのも。手をつなぐのも。土日ほとんど押さえてたのになんで完全にすり抜けて他のひとと」

「すみません、ほんとごめんなさい……」

ぺこぺこぺこ。告白直後にセックスしてセックス直後に浮気がばれたつて、考えてみたら若干、おかしいですね。

「これからはそんなことないですから。普通に俺、ちゃんともてないですから」

「本多は鈍いんだよ。すなお君だから」

突然本名を呼ばれてびびる。

「見た目ぱつとしなくなつて、本多がまともでやさしいことなんて、そのうち絶対誰か気づくよ。女の子が見た目だけで判断するのなんかすぐ終わるんだから」

「そ、そついうもん？」

「だからきつとその先輩も選んだんだよ。すなお君だから」

「あのう、俺あんまりその名前好きじゃないんですが……」

俺の名前は、直つて書いてすなおって読む。でも呼びづらいから、親も友達もナオって呼ぶ。だから、俺のハンドルはsをちっちゃく



して、sNaO。

「いいの。ずっと呼びたかったの。本多のはじめては全部あたしがもらって決めてたの」

「なにを言っちゃってんだあ！」

やっぱり俺が受けな、気が、あれえええ。しかし考えてみたら高久ってクラスでも一般女子で、だからゲーム好きで驚いたわけで、俺がまともにできないようなおしゃれとかしてるもんだから気後れしたわけで。

「うるさあい！ それを、それを、なに勝手に童貞奪われてるの、ばかあつ」

「その単語連呼しないでー！？」

「うまくできなくても大丈夫とか言うはずだったのにー！ ふたりとも下手ならいいよねとか言うはずだったのに、なにそつなくこなしてるの、信じられない！」

「え、結構びびってたよ！？ 外で出すの慣れてないからむずかし、じゃねえ！」

何言ってんだつられんなああ！ 高久にぼかぼか殴られる。痛いんだ普通に痛いんだ。かわいくぽかぽかじゃないんだ。っていうか高久そんなこと考えてたの！ 怒りの再燃したらしい高久に、またまた平謝り。で、ふと気づく。高久の妙な攻めモード。

「あ、でもそっか」  
「なに」

「そついや、最初も脅迫だったんだ」

おまえのヒミツをシッテイル。バラされたくなければ。

「あ、あれは悪かったなあとは思ってるんだよ……」

とたんに弱腰になる。そうそう、高久は高圧的に出ておいて、でも俺が怒ってたらものすごく押しが弱くて、っていうかやっぱり高久って基本はやさしい子なんだ。

「誘い受けてことか！」

「い、いやだ！ そういう言われ方、すっごいいやだ！ ほんだ、

が、全然なんにもしてこない、からっ、悪い……」

「してほしかったの？」

驚いて素で聞き返してしまった。たたかれた。いやでもそうだ、俺全部高久からもらってるんだ。きっかけを。これは申し訳ない、てか情けないなあ。

「え、じゃあ俺もできるだけリードします……結婚とか」

結婚？　もしもし俺？　いやプロポーズのつもりはなくて、そういう仲にはなったから、あと他にリードが必要なイベントっていうと結婚しか思いつかなかっただけで、思ったら高久がまたフリーズしている。

「あの、高久」

待て、今のは間違いとか言えないだろ、なんて言えば。  
「する」

うおおい？　高久の目がきらつきらしだった。背中をばしばしたたかれた。

「た、高久さん」

「そしたら、もう帰らなくていいね！」

満面の笑顔である。

「本多とずーっとゲームできる！」

「そこ！？」

「えへへへへへへへ」

「そ、そんな即答でいいの？　俺、来週転勤だよ？」

「うん、退社してからそっちいくね。一ヶ月かもうちょっとかかると思うけど」

迷いねえ。高久は俺の膝の上でごろごろした。やめてそこちよつとかたくなってるの。高久が履いてる俺のハーフパンツがまくれて揃えた腿がのぞいてるし。

リード。すでにどれもこれもできてない気がするけど。

「さとか」

ぴたつと高久が、里歌がとまる。おーれーのーかおーまっかー。

里歌の顔も赤くなるのを見ながら抱き上げて、キスをした。Ｔシャツの中に手を入れた。

「……痛かったら、入れないから、さわらせて」

これはへたれじゃないよ、気遣いなんだよ！ それにほらゴムは相変わらずないし！ ……あとで買っておこう。と思っただけのことごくうれしかった。

「いいよ。だいじょぶだよ」

里歌が俺の首に手を回した。部屋の壁の時計が4時とか差してたのに、そんなことあどうでもいいアレでした。

4週間後に俺は里歌の家に挨拶に行つて、5週間後に里歌が俺の実家に来た。6週間後に俺が地元で里歌を迎えに来て、婚姻届を出して転勤先に里歌を連れて行った。俺らふたりとも本籍が地元だったから。

ということで、俺達がどうなったかの、これが結論で、スタートだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5045v/>

---

その後のJの9

2011年10月7日02時43分発行